

第32回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 「留学を通して学んだこと」 －留学、帰国、そして現在の私－

第32回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会は、国際言語文化センター主催、国際交流センター共催にて「留学を通して学んだこと」というテーマで2011年12月3日（土）午後1時から511講義室で開催され、73名の参加者があった。

- ◆開催日時 2011年12月3日（土） 13時～16時50分
- ◆受付時間 12時30分～
- ◆開催場所 研究会：甲南大学5号館1階 511講義室
懇親会：甲南大学5号館1階 カフェ・パンセ
- ◆次 第
13：00～ 開会の挨拶 国際言語文化センター所長 教授 中村 典子

<第1部> ミニ講演 & 留学経験報告

- 13：05～ 講演1 国際言語文化センター 教授 津田 信男
- 13：20～ 講演2 国際言語文化センター 教授 胡 金定
- 13：35～ 留学経験報告 甲南大学在校生・卒業生・元留学生 7名
西村 奈央（アメリカ）
高本 沙耶（イギリス）
池田真理子（韓国）
寺元多可志（中国）
桑野 雄太（ドイツ）
時本奈美加（フランス）
キャティ・モンテスクラ（フランス出身：元甲南大学留学生）
- 14：45～ 休憩

<第2部> パネルディスカッション & 質疑応答

- 14：55～ パネルディスカッション
- 16：25～ 質疑応答
- 16：40～ まとめ 国際言語文化センター 教授 伊庭 緑
- 16：45～ 閉会の挨拶 国際交流センター所長 教授 長坂 悦敬
- 16：55～ 懇親会

第1部 講演・留学経験報告**講演1：津田 信男 先生**

自分の留学経験について紹介すると、最初はアメリカのコロラドにある短期大学で2年間勉強する予定だった。そこで、一般教養として数学、社会学、心理学、アメリカ史などの科目を学習し、1年後にユタ州にある Brigham Young University へ編入した。その時すでに TOEFL550点以上取得していたが、レベルの高い大学だったので授業についていくのは楽ではなく、成績に関して Probation という警告の手紙をもらったこともある。アメリカでの講義は、一方的に教師が講義をするのではなく、学生も質問や意見を言うディスカッション形式が多い。学生はよく勉強するだけでなく良く遊ぶので、メリハリが非常にはっきりした生活を送っている。留学生は1.5~2倍の勉強量が必要だと考えておいたほうがよい。その後、学費を賄うために途中帰国せざるを得なかったが、数年後ハワイにある同じ系列の Brigham Young University に編入し、そこで3年間学んだ。この大学を選んだ理由の一つは、留学生をサポートしてくれること、もう一つの理由は、アメリカで初めて英語教授法に関する専攻を持っている大学だったからである。留学中は、非営利団体のポリネシア文化センターや劇場等でアルバイトをしたり、様々な奉仕活動に参加したが、どれもよい経験になった。大学卒業前に大学院進学への関心がわき、友人たちが無理だと言うなかで先生に相談して出願し、ユタ州に戻って TESOL Certificate コースへと進んだ。そこでも、早朝からのアルバイトや障害者の生活を助けるなどして授業に参加していたが、学費の関係で再び帰国することになった。その後、2年間大手英会話学校で働き、またその修士コースへ戻って学習を続けた。卒業後も同じ英会話学校で働いていたが、15年前に甲南大学に就職した。就職後も在外研究の期間などを利用して Seattle University の修士課程や通信教育を受けながら Argosy University の博士課程を卒業した。

このような留学経験を通して、主に以下のことを学んだ。まず、チャレンジすること、そして、大切なのは正しい判断をすることである。もし、大学へ行くことを諦めていたら今の自分はいない。Steve Jobs も「一番大事なものは、自分自身の心と直感に従う勇気を持つこと。不思議なことに自分の心と直感、自分が本当になりたい姿をよくわかっている」と言っている。全くその通りで、自分の可能性を信じて心の中で絶対よいと思うことは必ずチャレンジしてみる大切である。

今まで150名以上の学生を面談しているが、可能性があるにもかかわらず妥協して、語学留学で終わってしまう人も多い。最後まで諦めずに勉強を続ける学生は TOEFL のスコアも伸ばし、留学先でも難しい授業を受けて頑張っている。このように諦めない学生は良い就職ができるし、就職しても社会に役立つ人間になると思う。そして、可能性を実現するには、たとえ小さなことでもよいので目標を持って取り組むこと。自身も国際交流センターの所長を2年していた際、交換留学にあと少しで手が届かない学生のために語学プラスというプログラムを作って、ニューヨーク州立大学（バッファロー校）、ブリティッシュ・

コロンビア大学と交渉し、スノーカレッジ大学やセントラルワシントン大学との提携もした。また、英語集中プログラム（夏休みの TOEFL コース）や TOEFL ITP/iBT の無料受験や15000円の援助などを実現していった。

最後に、聖書の言葉である「自分がやってほしいことを相手にもする」という奉仕の精神は、平生釧三郎の生き方にも見られる。彼は福利厚生のために無償で、かつ、豊かな人格を形成するために働いた。就職後も、自分本位ではなくサービス業ではお客様のことを考え、自分の後輩を利用するのではなく、後輩を育てて自立させようとする考えが大切である。スノーカレッジの留学生によると、留学をして最も学んだことは「小さなことでも目標をもって努力すること」である。留学を通して様々な経験をするのは、社会に出るよい準備になることだろう。

講演2：胡 金定 先生

留学のきっかけは、中国の大学で専任講師として教鞭をとっていた頃、1983年に世界銀行の奨学生として全中国で4名のうちの1名に選ばれたことである。大学の講師だったので留学の目的は明確だった。最初は、大阪外国語大学（現在は大阪大学）の外国語学部で研究生として、日中比較文学や日中比較文化について研究し、半年後、大阪外国語大学大学院修士課程に入学して、修士を終えた後、神戸大学博士課程に進み、博士課程修了後に中国へ帰国して元の大学へ復帰する予定であった。しかし、日本での仕事経験を積むために、甲南大学の教員公募に応募して採用された。

日本も中国も漢字文化圏だが、留学中は日本での学習や生活面においてカルチャーショックを感じることも多かった。例えば、大阪を歩いていると意味や内容のよく分からない漢字語に出会ったことである。「文化住宅」や「文化包丁」は中国には存在せず、また、辞書にも載っていなかった。「文化住宅」は、戦後に出来た大学周辺にある長屋のような住宅、中国では包丁は1種類だが日本では包丁の種類が多く、何でも切れるのが「文化包丁」だということがわかった。銭湯で表示されている「湯」という漢字は中国で「お湯・スープ」を意味するなど、同じ漢字でも意味の異なるものもある。また、大阪弁の理解にも苦労した。例えば、「私には行きません」が「わいは行きまへん」、「行きますか」が「行きまっしゃるか」となり、中国で学習した日本語との食い違いにも驚いた。そこで、日本語を徹底的に勉強するために、毎日一年間、全国紙（朝日、読売、毎日、日経、産経）を読み、同じ記事の内容を比較したりして日本語の能力を高めた。外国語の勉強として新聞は最高の教材である。このような学習のおかげで、私の日本語は幸い大阪弁の影響を受けなかった。また、日本の小学校、中学校（所謂義務教育）9年分の教科書「国語・社会・生活」の三教科を取り寄せて、日本の文化、生活、子供の言葉の使い方等についても学習した。さらに、常用漢字以外には必ずフリガナ表記のある岩波ジュニア新書を用いて様々なジャンルの本を読破するなど、並々ならぬ努力で学習して読解力を伸ばした。その他、毎日日記をつけることで日本語を書く練習を習慣づけ、コミュニケーションやリスニング

能力を伸ばすためにテレビのニュースを繰り返し見たり、録音して同じように発音する練習をしたりと、言語習得の学習にかなりの時間をかけた。交流会等に招待されたり、参加して実際に様々な世代の人と交流を深めることで実用的な日本語表現能力も養ってきた。

このように積極的な態度で臨んだ留学では、様々な人と出会うことができ、自分の人生を豊かにしてくれた。実際、自分の人生も変わり、価値観も多様化になってきた。また、自国の見えないところを、外国の観点より再認識することができる。その他、日本人の友人が多くでき、大切なのはお金ではなく友人であると実感した。日本での留学は私にとって本当に貴重な経験となった。したがって、皆さんもチャンスがあれば、是非留学してみること、しかも長期で行くことを強く勧めたい。1年くらい滞在しなければ、その国のことはわからないと思う。その後、私は学生という立場からだけでは、本当に日本の社会を把握することが難しいと考え、甲南大学で働くことにした。最初は短期間で帰ろうと思っていたが、仕事をして異なった観点から日本という社会が理解できるようになるとまた面白い。学生以外の立場で滞在することで、違った認識ができるからである。

留学経験者報告：

1. 西村菜央さん（文学部英語英米文学科2010年卒業）

- 留学先：アメリカ
- 大学名：スノーカレッジ
- 留学年度：2008年
- 卒業後商社勤務（2010年4月～2011年10月）

スノーカレッジでは、留学生のための語学の授業をとらずに現地の学生が受ける授業に参加した。最初は、授業内容がさっぱり理解できずにとっても苦勞した。特に大変だった体育の授業では先生が何も書かずにひたすら話すので、よく発言をするクラスメートにノートを見せてもらえるように頼むなどして、積極的に自分から働きかけるようにした。そうすることで友達も増え、単位を取得することもできた。留学中で大切なことは、積極的に自分で行動すること。そして、困った時には必ず助けてくれる人がいるということも実感した。自分自身も留学中に移民のメキシコ人に英語を教える機会があり、人として誰かを助けるという良い経験ができた。

留学前の勉強については、TOEFLのスコアに伸び悩んだ時期もあり、特にリーディングが苦手だった為、リーディングの勉強を重点的に行った。すると、最終的にリーディングが一番得意になった。帰国後も英語に触れる時間を増やすように努力し、電車の中で単語帳に目を通したりと工夫した。

4年生で帰国したが海外生活で身につけたチャレンジ精神と留学経験を上手く就職活動につなげることが出来た。就職先の商社は今後海外に進出する予定があり、英語を使う可能性があるということだったので、チャレンジしてみようという気持ちで入社した。残念ながら会社の事情で英語が使える機会には恵まれなかったが、受け身な気持ちで働くの

ではなく積極的に物事を提案して実行するようにしたので、責任のある仕事も任されるようになった。商社の仕事は忙しかったが、留学で培った粘り強さのおかげで様々な面で努力することができた。最終的に、留学を通して、ただ英語を勉強したいから留学というのではなく、こういう風になりたい、こういうことをしたいから留学したいという明確な目標を持つようにすることが大切だと感じた。

2. 高本 沙耶さん（文学部社会学科4年在学中）

- 留学先：イギリス
- 大学名：リーズ大学
- 留学年度：2010年～2011年
- 神戸大学 大学院進学予定

リーズ大学では理論と実践という授業で統計を用いて勉強する機会があり、学問の深さや面白さに触れることができたので、大学院でさらに勉強したいという気持ちが確かなものになった。帰国してからの受験勉強が実り、大学院では国際問題を扱う国際教育研究科にて貧困や環境に関する研究に取り組む予定である。

小さい頃から異文化や外国社会に関心があり、両親が中国からの移民なので、親戚に日本語を教えたり、様々な人から中国やマレーシア、インドネシアの話聞く機会に恵まれていた。このような環境のおかげで自然と留学に興味を持つようになったのだと思う。

留学して感じたことは、イギリスの学生は（他の国の学生もそうだと思うが）、とてもよく勉強し、よく遊ぶということ。学生たちが勉強と遊びに対する姿勢を上手く切り替えてバランスのとれた生活を送っていたのが印象的だった。また、イギリスでは地域によって英語のアクセントが異なるため先生が話す英語も多様で、最初は授業を理解するのに苦労した。授業中は、積極的にクラスメートに話しかけたりして友人を作るように心がけ、わからないことを教えてもらうようにした。

文化の違いに戸惑ったことは、様々な国出身のフラットメイトと共に生活するうえで、育った文化や環境が違おうと、感覚にかなりの差があると身をもって感じたときである。また、ムスリムの人と話す機会もあり、テロや過激派というイメージを持ちがちだが、宗教に関する質問にも喜んで答えてくれたり、非常に優しく情が深い人たちであることがわかった。文化が違うからと偏見を持って壁をつくるのは自分自身で、その壁を自分でとりはらって、話しかけることが大切だと実感した。

留学前の準備として、英語の勉強は地道にひたすらコツコツこつこつとこなしていた。留学先ではリーディングが大変と聞いていたので、自分が今後研究したい分野に関する文献やインターネットでの情報を読んで単語や知識を頭に入れ、活字にも慣れるように努力した。このように、毎日コツコツと物事をこなす習慣が留学中の学習にも活かされ、帰国後も大学院への勉強が集中して継続できたので合格につながったと思う。目標を達成するには、毎日少しでもよいので地道な積み重ねが大事だと実感した。

3. 池田真理子さん（文学部日本語日本文学科2011年卒業）

- 留学先：韓国
- 大学名：漢陽大学
- 留学年度：2009年
- 現在関西大学 大学院生（韓国語専攻）

韓国では、日本で日々当たり前にならしていたことが出来なくなり色々苦勞したが、留学はその国に行ってみないとわからないことが沢山あり、そういった苦勞も含めて良い経験をしたと思う。外国では自分が当たり前だと感じる基準が相手のそれとは異なることがあり、頭ではわかっているにもかかわらず実際に経験してみないとわからないことが多々ある。

貴重な体験としては、現地の学生と一緒に授業を受けたことである。苦勞もしたが授業は絶対に参加すると自分で決めており、決めたことをこなすことで達成感も感じられた。小さな目標でもよいので自分なりに決めて実行していくことが大切である。

留学前は語学力を伸ばすことが大切だと考えており、検定試験を受験するという目標を定めて、それにむけて学習した。また、前もって甲南大学の留学生と知り合いになっていたおかげで、韓国へ行っても連絡がとれる人がいると思うだけで安心感があり、精神的なプレッシャーも軽減されたのだと思う。留学中は政治に関することもよく聞かれ、自分の国や政治のことをもっと勉強していたら、さらに深いコミュニケーションがとれたのと感じることが多かった。

帰国後は留学で培った経験や知識を活かしたいと思い、大学院へ進学することに決めた。今でも字幕なしで韓国ドラマを見て一緒に発音したり、日記や手紙を書いたり、できるだけ常に韓国語に触れるよう心がけた。今でも知らない単語に出会うと、すぐに調べようとしている。最初、私は留学には向いていないと思っていたが、向いていないからやめようと思わないで、自分の経験より留学してみることを強く勧めたい。

4. 寺元多可志くん（理工学部物理学科4年在学中）

- 留学先：中国
- 大学名：北京郵電大学
- 留学年度：2010～2011年

理工学部の学生だが留学に興味を持ったきっかけは、関西留学生音楽祭のスタッフをしていた際に「留学生は宝だよ。もし、外国に友達ができたらその国と戦争しようと思わないだろう」という言葉に感銘し、留学生と交流してみようと思ったことである。まず、大学2年時に夏の海外語学講座に参加し、西北大学で1ヶ月間学習した。短期間だったが、中国人と話すことが楽しいと感じ、中国語が上達したと実感できた。次に約1年間の留学を決意した理由を紹介する。

- ① 語学力の向上：できるだけ中国人と同じレベルに近づく（発音重視）
- ② 中国人の友人を沢山作る：一生涯のつながりがもてるように

③ 日中友好へと自分自身を前進させるため

留学中、午前是中国語を学習して午後からは主に HSK 検定試験の勉強、火曜日は書道クラスにも参加した。後期は午前の語学の授業に加えて、午後からは中国武術、日本映画鑑賞、大学数学、書道など様々なクラスに積極的に参加した。秋の国際文化発表会では、中国語ラップを披露したり、三国志の演劇にも出演した。

困難な体験としては、ルームメイトが精神的に激しく落ち込んだ時、どうすればよいか困ったことである。幸い授業で学習した「励ます、慰める表現」を使って相手を必死で励まし、中国語で共に理解し合うことができた。また、半年も雨が降らず、その上、暖房システムにより学生寮がひどく乾燥したため、皮膚がかなり荒れて憂鬱な気分になることもあった。さらに、病気も経験した。寮の改修工事に伴い引越しを強いられ、環境の変化によるストレスからか風邪をひいたり、油によると思われる食中毒も経験した。

しかし、休暇中には旅行も満喫した。上海や天津、四川省にある世界遺産、東北地方のハルビンなどを観光し、寧波にある友人宅にも招待された。地元の中学校に案内されたり、家庭料理も堪能した。

留学で得たことは沢山ある。例えば、このように人前で堂々と中国語を披露する度胸がつき、積極的に話せるようになったことである。また、具体的には、ナンチャクができるようになったり、値段交渉の仕方も上手になった。中国では貧富の差が激しく、高校もいけずに出稼ぎをして家族と一緒に住めない子もいる反面、自分は留学したり物理を勉強できる恵まれた環境にいることを改めて感謝しなければいけないと思った。

卒業後は商社に就職が決定しており、仕事でも中国語を用いて貢献したいと感じている。今後も中国人の方々と交流を深めていき、さらに日中文化に関する理解を深めていこうと思っている。

5. 桑野雄太くん（法学部法学科3年在学中）

- 留学先：ドイツ
- 大学名：フンボルト大学
- 留学年度：2010～2011年

留学の動機として、一つはイタリアに1年間留学した兄の影響もあり、ヨーロッパで生活して異文化を肌で感じたいという気持ちがあったこと。二つ目は趣味であるクラシック音楽の影響である。小さい頃からピアノを習っており、有名なバッハやモーツァルト、ベートーベンの音楽の発祥地を訪れてみたいと思っていたからである。最後に、日本はドイツから法律的な影響を受けているので、法律におけるドイツと日本のつながりに関心があったためである。

まず、ドイツ滞在中のイベントを中心に説明すると、5月にブランデンブルグ門前で開かれたイースター祭のイベントに参加し、大きな卵がショッピングモールで展示されている様子を写真とともに紹介した。11月末頃からは各地でクリスマスマーケットが始まり、

ベルリンのクリスマスマーケットを楽しんだ。イルミネーションが非常に美しく、グリューワインという温かいワインが有名で、とても美味しく心も温まるのでおすすめである。新年はジルバスターといい、ブランデンブルグ門前でも人が沢山集まり、花火や美しいイルミネーションと共に新年を盛大に祝福する習慣がある。

留学先のフンボルト大学の講義室は非常に天井が高いのが特徴的であり、快く勉強できる環境である。最初はドイツ語による授業が全然わからず、辞書などを使って何度も単語を調べながら理解しようと努力したところ、1年で法律の単位を3つ取得することができた。留学前は、ドイツ語で生活することに不安を感じていたが、やろうと思えば必ず外国語であれ自分の思いを表現できることを実感した。

また、フンボルト大学のコーラス活動に参加し、ライプチヒのトーマス教会やパリのユネスコの会場で歌うことができた。このように、趣味の音楽を通して貴重な体験をした。

留学を通して異文化への理解が深まっただけでなく、自分の意思を伝えるコミュニケーション力が高まったと感じた。また、震災の募金活動などを通してドイツと日本に関わる人々の深いつながりを実感した。今年は日独交流150年の年だったが、それに関する記念のイベントもベルリンで行われていた。今後は、ドイツ語を使って専門である法律を活かし、かつ、国際的な交流ができる仕事として国際公務員や外交官を目指したいと考えている。最後にアドバイスとして、留学をするかどうか迷っている方は、必ず留学を選んだほうがよい。知らない自分、新しい自分を発見できるからである。

6. 時本奈美加さん（経営学部経営学科4年在学中）

- 留学先：フランス
- 大学名：リヨン第3大学
- 留学年度：2009～2010年
- 卒業後客室乗務員として勤務予定

憧れのフランスに住みたいという単純な理由とフランス語の能力を伸ばしたいという理由から留学することを決意したが、事前の準備段階から手間取ってしまった。ビザの申請などもぎりぎりになってしまったが、中村先生とシッシュ先生に助けてもらったので、何とか留学を実現することができた。フランスへ渡ってからも大変なことは山ほどあり、講義の理解はもちろん、生活面では銀行口座開設にも苦労した。最終的に留学中に大切だと学んだことは以下の3点である。

- ① 何のために何故それを選んだのかというしっかりとした目標をもつこと
- ② 困った時は一人で考えずに誰かに助けをもとめること
- ③ チャレンジすることをあきらめず、失敗してもなぜ失敗したかを考え、再チャレンジすれば、絶対何か成果が生まれるということ

最初は単にフランスに行きたいという気持ちで留学してしまったためか、語学もある程度頑張っただけで、それなりにフランス語で生活できるようになると、授業に出なくなることも

増え、「自分が何をしにフランスに来たのか？」と悩む時期があった。留学前に明確な目的を持っていなかったのが原因である。自分は一人で考えこむ傾向があったので、経営学部のゼミ担当の西村先生に相談したところ、「理由はなくても次に進まなければ何も生まれない。フランスでしかできないことをやってみればどうか？」とアドバイスを頂いた。そこで、卒論の研究のため、衣類に関する消費者対象のアンケートを周囲の助けを借りてフランス語で作成し、実施した。アンケート調査の際も、最初は多くの人にきつく断られたが、断られた原因を考え直した上で、元気に挨拶し、笑顔でアンケートの目的をきっちり説明をするようにしたところ、多くの人が立ち止まって答えてくれるようになった。つまり、失敗から学び取ることが大事だと実感した。

帰国後も語学力を維持するため、大阪ヨーロッパ映画祭で、スイスから来日した監督夫婦の通訳をするなど、いろいろとチャレンジするように心がけた。そうした中で、将来どうしても客室乗務員になりたいという自分の本当の気持ちに気がついた。自分を見つめ直したことで、卒業を1年伸ばして就職活動をするという決意ができた。何のためにこの仕事したいのかを深く考えたので、結果的に夢がかなったのだと思う。もし、留学しようかどうかと悩む方がいれば、熟考し、絶対にあきらめないことが大切である。

7. Cathy MONTUSCLAT キャティ・モンチユスクラさん（元甲南大学留学生）

- 出身：フランス
- 出身大学：リヨン第三大学 修士課程修了
- 留学年度：2006～2007年
- 卒業後來日し、フランス語と英語を教えている

留学先に甲南大学を選んだ一番の理由は、ホストファミリーと暮らせるからである。日本に留学したいと思った理由は、日本語を上達させるためだけではなく、日本の文化などを体験しないとわからないことが沢山あると感じていたからである。甲南大学の留学プログラムは午前中に日本語を学び、午後からは自分の専門科目を英語で勉強するので、午後はビジネスの授業を英語で受けていた。

本来は9か月のプログラムだったが、日本がとても気に入ったので、プログラム終了後もビザを3か月延長して計1年間日本に滞在した。留学前と後では、自分自身にも、かなりの変化が感じられた。自分の価値観は変わらないが、自分を見つけたというか、勇気をもって色々な事ができるようになったので、留学は絶対にしたほうがよいと思う。

留学中は、銀行口座の開設などもホストファミリーや友人が手伝ってくれたので、困ったことはほとんどないが、落ち込んだり、不安に思うことはあった。特に最初は、日本語がよくわからないし、また、毎日、趣味など同じ話題について話すわけにはいかないので、単語をもっと増す必要があると感じた。また、日本人の彼氏と上手く意思が通じず、喧嘩になったときは不安な気持ちにもなった。留学すると、1年間海外にいて寂しいと感じるときもあるだろうが、新しい家族や友人と過ごす時間は楽しいので、留学中は様々なこと

にチャレンジして、できるだけ忙しい生活を送るほうがよいと思う。私は武道にとっても関心があったので、甲南大学の日本拳法のクラブに入り、ホストマザーと生け花のクラスにも通った。今でもホストファミリーと月1回は会っている。困った時は一人で悩まず、相談したり助けを求めると、友達との人間関係がより深くなったりすることもある。特に、日本に来て最初の1カ月間は楽しいことばかりだった。しばらくすると、フランスでの生活と比較するようになり、両国の良い点と悪い点が見えてくる。逆に、帰国してから、フランスの嫌な面だけが見えるようになり落ち込むこともあった。留学すると、留学する前は考えなかったことを考えたりもする。そこで、しっかり考えると本当の自分が見つかり、自分に自信が出てくる。留学は、本当の自分探しである。

第2部 パネルディスカッション

■ 語学力の向上：帰国後、具体的にどの程度語学力がUPしたのか。

最初は留学先での会話がよく理解できず、あまり話せなかったので、飛行機やタクシーに乗る際、また、電話でのやり取りや銀行口座の開設、寮の手続き等、日常生活で大変苦勞した学生が多かった。しかし、帰国後はBBCなどの英語のニュースがよりいっそう理解できるようになったと実感したり、韓国語のドラマも字幕と実際に話されている言葉との違いに気づいたりリスニング力が伸びたと感じる学生が多かった。留学中に必死に授業を理解しようと努力し、コミュニケーションを通して様々な表現を学んでいくうちに会話力もつき、最終的には、自分で銀行の解約手続きやビザ取得の手伝いも出来るようになったようである。帰国後も、留学中にできた友人とSkypeなどで話す際に、日常会話が以前よりスムーズに出来るようになったと述べた学生もいる。

帰国後に語学検定試験を受けた学生も、以前より文章が速く読めるようになったり、リスニングパートが随分と理解できるようになったり、実際に良い結果が出たりなど、何らかの形で語学力の向上を実感していた。中には、リーディングや文法セクションの問題は日本で集中的に勉強するほうが効果的だという意見もあった。留学前は単語や文法などの学習が中心となるが、留学すると言葉を話す練習ができるので、留学しなければある一定のレベルを超えて言語運用能力を伸ばすのは難しいと感じた学生もいた。

■ 効果的な勉強法：留学に必要とされる試験の点数をクリアするために。

ほとんどの学生が多くの参考書や問題集に手をつけるのではなく、1冊から数冊に絞って何度も繰り返し学習する方法が効果的だと感じたようだ。また、大学でTOEIC、TOEFL、検定試験準備のためのクラスを受講し、そこで使われていた教材をしっかり理解することで授業での学習を大切に、さらに過去問などに取り組んだ。中には検定試験のリスニングパートのCDを何度も繰り返し聞き、リスニング問題の流れやスピードに慣

れることができたので「毎日聞くことが合格への道」だと実感した学生もいる。その他、自分なりに役立つ単語や文章をまとめたり、大学でチューター制度を利用して実際に外国語を聞いたり話す機会を増やしたり、図書館にある英字新聞や雑誌で最近の話題に目を通す工夫をしていたりと、個人によって様々な学習法が紹介されたが、最終的にほとんどの学生が、同じことをコツコツ毎日繰り返しこなすこと、日々の授業での学習を大切にすること、自分に合った勉強方法を見つけること、などが効果的であると感じたようだ。

胡金定先生によると、試験勉強は自分の国でやったほうが効果的であり、受験勉強を念頭に置いて留学するのではなく、本などで勉強できないことを外国で学ぶことが大切だということだ。例えば、会話における省略表現など、本では「私は〇〇です」と記載されているが、実際の会話では「〇〇です」となり、逆に「私は」が入ると垢抜けた日本語にならない。本に書いてある表現と、実際使われる表現は異なることも多いからである。また、自身の具体的な勉強法も紹介された。日本語を勉強した際、ポケットサイズの辞書に載っている例文を1日裏表2ページ覚えることを習慣づけ、寝る前の5分間に単語を50語、そして、朝起きる前にそれらを復唱し、暗記できているかを確認することで語彙力を伸ばした。

津田信男先生も、学習を習慣づけることの大切さを説明した。特に、学生に強く勧めるのは英英辞典を使用して、英語で物事を考える習慣をつけることである。そうすると、例えば、曖昧という意味を持つ *vague* という単語を知らなくても *not clear* と英語で説明できるようになる。その他、VOA(Voice of America) というニュース番組をインターネットで見ると、発音が聞けるだけでなくスクリプトも出てくる。リーディングの能力を伸ばすには多読が必須なので、TOEFL 対策として *National Geographic* という雑誌もお勧めである。

■ 就職活動対策：留学中にどんな準備をし、いつ活動を開始したか。

留学前から就職すると決めていた学生は、留学中にも就職サイトに登録したり、募集を開始している会社のホームページなどに目を通して、興味のある会社の情報を保存しておくなど、できる限りの準備をするよう努めていたようである。質問があればキャリアセンターの人にメールで問い合わせたり、4年生でも帰国してから合同説明会に参加してエントリーすれば十分間に合ったという学生もいる。一方で、4年生の6月に帰国したが自分の行きたい会社が見つからず、再度自己分析して目指す職種が見つかり、1年卒業を伸ばした学生もいた。また、北京やロンドンなどの大都市では日本企業関連の合同会社説明会が実施され、企業の人と話す機会もあったようである。だが実際は、本格的に就職活動を開始したのは帰国後だという学生が多く、7月末に帰国してから自己分析をするなど就職活動の対策をたてて9月末に内定した学生もいる。韓国などの近隣国が留学先の場合は、日本で行われている合同説明会のために一時帰国する学生もいたようである。

一方で、留学前は就職か進学か明確に進路を決めていなかったが、大学院へ進む道を選

んだ学生もいた。留学してからもっと勉強したいと考えるようになり、大学院へ進む意思が固まった高本さんは帰国後の4年生の夏より受験勉強を開始し、無事大学院への進学を夢をかなえた。留学前は就職よりの考えだった池田さんも、留学して韓国語が伸びてきた時に、もう少し韓国語を勉強してから就職しても遅くないのではと感じて大学院への進学を決心し、その気持ちを実現させた。現在3年に在学中の桑野くんは、留学後に国際的な機関で働きたいという思いが一層強くなり、せっかく留学で得た知識と学力がまだ不十分な状態で卒業するのではなく、大学院へ行って国際公務員になるために、今後もさらに学習していきたいということだ。

(文責：吉田 佳代)